

第 22 話 (アンハルト伯の城にて)

オイレンシュピーゲルはラッパ手として雇われ、塔の上で見張りをすることになった。ある日、当番の時、食事が忘れられて届かなかった。ちょうどそのとき敵襲があり放牧の雄牛が全部奪われた。彼は窓からのぞきただけでラッパの合図をしなかった。敵襲に気づいて出撃した伯は、塔の上で寝そべっているティルを見つけ叫んで訊いた。ティルの応答：食事前には叫ぶなどできない。自分がラッパを吹いたら、敵を呼び寄せることになるから、もっと大変になっていた。追撃の間またしても食事は忘れ去られ、伯が勝利し、奪い返した牛を屠ってのねぎらいの食事にもありつけそうになかった。塔からみえる野原での食卓を見ていたティルは、頃合いをみはからい敵襲のラッパを吹いたので、再出撃となった。その間に好物を塔に持ち込んで食べた。

愚弄されていると思った伯は見張りを交替させ、ティルをお供の一兵卒にした。うんざりしたティルは上手にやめさせて貰う手段として、出撃の時はしんがり、帰城の際は先頭に立った。訳を尋ねられ「塔の上で飢えていたので戦える体力を回復するのが先。そのため、真っ先に食卓につき最後まで食べている」と答えた。彼は首になって喜んだ。敵と渡り合うのは性に合わなかったからだ。



第 80 話 (ケルンの旅籠にて)

朝食の支度が出来ないうちに昼になってしまった。宿の主人は「食事が待てない人はなんでもあるものを食べておくように」といった。オイレンシュピーゲルは巻パンを食べてから籠のそばに腰をおろした。12 時に料理が出されたが、オイレンシュピーゲルは籠のそばに座ったままだった。主人の問いに「食べたくないのさ。焼肉の匂いで腹一杯になってしまったんでね」と答えた。

食事がすむと皆代金を払ったが、オイレンシュピーゲルは籠のそばに座ったまま。主人はぶんぶんしながらティルに食事代 2 プフェニヒを請求した。匂いで腹が一杯になったのだから焼肉を食べたと同じ、だから、一食分請求するのだという。そこでティルは白銅貨を一枚出して台の上に投げ、「御主人この音が聞こえたかね」と聞いた。主人が「その音ならよく聞こえたさ」と答えるとすばやく白銅貨を拾い上げて財布にしまい、「この金の音があんたのたしになったのと同じくらいは、焼肉の匂いもあっしの腹のたしになったわけさ」といった。

第 17 話

オイレンシュピーゲルはニュルンベルクにきて、どんな病でも治す名医であると宣伝した。町の新しい病院は病人であふれていて、院長は病人たちを少しでも多く、もう健康になったといって退院させたがっていた。そこで彼はティルに患者たちを治して貰えればたっぷりお礼をするといった。ティルは一人一人の患者にいった。「お前たちを治すにはお前たちのうち一人を黒焼きにして粉にして、それを他の者に飲ませる以外は方法がない。だからお前たちのなかで歩くことができない者を粉薬にしようと思う。そうすれば他の者を助けることができる。わたしが治った者はでておいでといったら寝過ごさないように。最後の者が皆の身代りになるのだから」。

ティルが叫ぶと皆は松葉杖をついたり、なえた足をひきずって出てきた。10 年間ベッドから離れられなかった者までが走った。病院が空っぽになってしまうと院長は大変感心して金を払い、ティルは馬で出発した。

しかし三日もたつと患者たちは皆戻ってきて、自分の病気を訴えた。院長はびりの者が焼かれて薬にされると脅されていたことを知った。院長はいっぱいくわされ、患者たちは前どおり病院にひしめいたままで、金は戻らなかった。



第 57 話

リュウベックでは大変厳しい法がしかれていたもので、オイレンシュピーゲルはここではいたずらができないと考え、おとなしくすることにした。市参事会堂の地下食堂で働いていたワイン差配は大変高慢、不遜な男で自分ほど賢い男はいないと思っていた。そして自分を騙したり、自分の知恵を上まわったりするような人間がいたら一度会いたいものだとしじゅういつていた。そのためにこの男は多くの市民から嫌われていた。オイレンシュピーゲルはその話を耳にし、いたずら気をおさえることができなくなった。

そこで全く同じ型の二つの缶を持ち、片方には水を入れて上着の下に隠しもち、空の缶を手にもってワインケラーにでかけた。そして大缶一杯分のワインを計らせ、ワインの入った缶と水の入った缶を素早く取り替えて、値段をきいた。10 プフェニヒの請求に「高くて手が出せない。6 プフェニヒしかもっていないから。その分だけもらえないかね」ときいた。ワイン差配は怒って「お前は参事会員様のワインの値段をきめようってのか。気に入らなければ参事会員様の酒蔵に戻すんだな」といった。「だめならワインを戻すよ」との答えに、ワイン差配はいぼって缶をとりあげ、それが水だとは夢にも思わずに注ぎ戻しながらこういった。「お前はなんというまぬけな奴だ」。オイレンシュピーゲルは「お前が阿呆だということがよくわかったよ。誰だって阿呆に騙されないほど賢いものはいないのさ。たとえワイン差配であってもね」とワインの入った缶を上着の下に隠しもち、空の缶は見えるようにもって出ていった。



第 58 話

ワイン差配はティルの言葉が気になったので捕吏を呼び、あとを追ってつかまえさせた。捕吏はワインの入っている缶を発見し彼は盗人として獄に入れられた。オイレンシュピーゲルを憎んでいた人びとは彼には絞首刑がふさわしいと主張した。別の者はただの手の込んだいたずらにすぎないという。なぜならワイン差配がかねてから誰も自分を騙せる者はいないと豪語しあまりうぬぼれているからやったにすぎないのだとみていたからだ。

絞首台で死刑との判決が下された。処刑の日になり町中が大騒ぎになった。市参事会はティルを釈放するよにとの嘆願などで絞首刑が妨害されるかもしれないとびくびくしていた。ある者は彼がさんざんいたずらをしつくした生涯をすごしたあとだから、どんな最後を迎えるのかみてみようと思っていた。なかには彼が魔術を使って逃げおおせるだろうという者もいた。大多数の人びとは彼がうまく逃れることを望んでいた。

彼は引き出されたとき、全く静かで一言もしゃべらないので、人びとは彼が観念したのかと思った。処刑場に来ると彼は口を開き、市参事会員に近くへきて欲しいとたのみ、謙虚にひとつだけ願いをきいて貰えないかといった。彼は決して命乞いもしないし、金や財産を要することは頼まないという。市参事会員たちは集まって相談し、あらかじめ彼が願えることと許されないことをはっきりさせたいと願いを聞き入れることにきめた。



オイレンシュピーゲルはいった。「私が願わないといった事柄についてはお願いしません。私のお願いをかなえて下さるお気持ちのある方は手で誓って下さい」。そこで皆手と言葉で誓った。そこでオイレンシュピーゲルがいった。「市参事会員の皆さん。皆さんが誓って下さったのでお願いを申し上げます。私が吊されてからワイン差配さんに三日間毎朝来ていただきたい。ケラーの主人を先頭にして死刑執行人の方の順で私の尻に厳かにキスをして欲しいんです」。それを聞いて彼らはぺっと唾を吐き、何が些細なお願いなものかといった。皆はそこで相談して特別の情け、その他の新たに発生した理由によって、彼を釈放することにきめた。